

## 第三十章 決 戦

福田首相の出馬が決まって、総裁公選は福田、大平、中曽根、河本の四者で争われることが確定的となり、事実上の戦いの火蓋が切られた。

鈴木善幸を中心とする作戦担当者は、系列の国会議員、地方議員に檄を飛ばし、秘書団や個人後援会幹部を動員して、ただちに大平支持の選挙運動に入った。これまで獲得した党员、党友の支持を固め、さまざまなルートで調べあげた有権者に対して、大平支援の説得を行うのである。

政策担当者は、大平が最後まで大福間の信義を重んじ、福田首相の求めに応じて打ち出そうとしなかった基本政策を明確化した。政策は三つの柱にまとめられた。その第一は、大平が年来唱えてきた平和維持の考え方を「総合安全保障戦略」という形により具体化したものであり、第二は、政策の一貫性を重んじて、昭和四十七年総裁公選時にかかげた「田園都市建設」の計画であり、第三は、生きがいのある社会づくりを目指すための「家庭基盤充実」の構想であった。あとは発表のタイミングである。大平は、十月二十六日、兵庫県知事選の応援途中に立ちよった京都市で「田園都市建設」を基本政策の目玉として打ち出し、二日後の二十八日の日本記者クラブの講演では「家庭基盤の充実」を発表した。

大福密約説については、十月三十日の日本テレビのインタビューで、大平は「政権の授受は私議すべきで

はなく、(福田さんとの)協力関係は無条件だった、と私も福田さんも心得ている。したがって、(大福密約といった)そうしたウワサは取り上げる値打ちのないものと思っている。たとえあったとしても、それが守られなかったからといって、たいした問題でない」と、もはや過去の行きがかりにこだわらない態度で応じた。

十一月一日、いよいよ総裁公選予備選の告示の日である。立候補の届出を終えた大平は、記者会見で、「自民党再生をかけたこの選挙を計画し準備してきた責任者の私が、今回立候補できたのは光栄であり、感無量でもある。……互いにフェアな戦いをして党再生の活路を見出したい」とあいさつし、その後、青山墓地にねむる池田、吉田両元首相の墓参に赴いた。

午後一時からは、『大平正芳総裁候補擁立決起大会』である。準備は大平派と田中派が共同で進めた。ホテル・ニューオータニの会場の前には『香川県民の願望を突らせよう大平内閣』の横幕が張られ、熱心な後援者たちが続々とつめかけた。会場は、約七千の参加者で立錐の余地もなかった。会は、まず『大平正芳総裁候補推薦本部』を代表して鈴木善幸があいさつに立ったあと、田中派の長老西村英一副総裁が『わがこととして戦う決心をした』と強い支援の意を表した。また桜田武日経連会長は、「私は三千日か四千日たつたらあの世へ行く。池田さんに会って、大平さんはあんたより上だったと言わせてください」と熱烈な激励の言葉をおくった。

大平幹事長は、これに対して、「光栄あるチャンスを与えていただいたことに感謝する。全力をあげて闘いぬく」と謝辞を述べたが、もはや一切の迷いもこだわりも捨てた姿には、満場が息を呑むような闘志があられていた。

出陣式の後、大平は立候補の挨拶のため保利議長を訪れた。この日の午前、福田も同じく保利のところへ挨拶に行ったが、保利は「私は二年前のことに責任を感じている。私がこの耳で聞いたことは忘れないよ」と鋭く福田を非難したという。

立候補の届出締切りは十一月四日である。抽選の結果、候補者の届出願は、福田起夫、中曽根康弘、河本敏夫、大平正芳となった。党ではこの順で立候補に関する一切の発表を行うこととしていたが、届出の順番ひとつで悲喜こもこもの光景を現出するほど高ぶった雰囲気となっていた。

立候補届出後の四人の記者会見で、大平は、中曽根、福田の二者の『有事立法推進論』に対して、『総合安全保障戦略』の立場から「いますぐ取り上げないと日本の安全が保てないとは思わない」と反論を行うとともに、憲法改正問題についても、「国民の意思はそこまで熟していない」と改正論に反対の立場を明らかにした。大平は各社のインタビュアー等で数日を費やしたのち、いよいよ全国の遊説にスタートした。

実はこの遊説の日程づくりが、容易ならぬ仕事であった。この予備選では、三位以下には点は配分されない。したがって、選挙戦略は絶対に一位か、二位を確保しなければならぬ重点府県と、見送る府県とを見きわめなければならぬ。そこで大平陣営では、かねてから練った日程にしたがって、地方遊説第一声は山梨県甲府市で行うこととなった。田中派ではあるが、福田首相に近い実力者の金丸信国会対策委員長の地元をまず押さえておくためである。

大平幹事長は、「進め進めでは政治のやれない段階にきた。これまでの高度成長の量的拡大の時代から質的向上への大胆な転換をはからなければならない」と述べるとともに、「私は秀才でもないし、やり手でもない。しかし最後に、真実一路に、当たり前の政治を勇氣をもってやりたい」と訴え、第一声を終えた。その日から選挙の終盤まで、大平は全国を駆けまわることになるが、その行程は一万八千キロ、直接に顔を合わせた有権者の数は五万人を超えた。

予備選がスタートした直後、大方のマスコミは、福田候補が一位、大平は二位だがその差は大差という予測であった。しかし、各議員が地元に戻り、実際に有権者に当たってみると、党员党友の多くは各候補の人物や政策を十分に見極めてから自分の一票を行使しようとする慎重な態度であることがわかってきた。しかも、

その数は予想以上に多く、全有権者の半数近くに達すると推測された。この事實は、世論調査で福田側に大きく水をあけられていると見られていた大平陣営を勇気づけた。

これに対し福田側は、圧倒的優勢の前評判を頼りに「世界の福田」全国の津々浦々から福田立つべしという声が挙がっている」等と公言し、鮮やかな勝利を確信して、ムードに乗った戦術をとった。

運動が始まってしばらくたって、ほとんどのマスコミは「福田優位」の予測を変えなかった。福田陣営は、総持点千五百二十五点の中で、過半数の得点をするか、あるいは二位を百点以上離すかすれば、本選挙を行わず、一発で勝負を決められると判断し、総理総裁という権威の下に県知事、県連幹部らを通じて有権者に「上から」猛烈な働きかけを行った。その目算は八百点以上であった。そして十一月八日には、福田首相は「予備選であざやかで明快な結論が出れば、本選挙でも尊重すべきだ」と、暗に自分が一位で大平が二位となった場合には、大平に本選挙への立候補を断念せよとする牽制的な発言を行った。

これに対して大平幹事長は、「選ばれた二人のうちどちらかが辞退しない限り、本選挙をせずに話し合いで決める性質のものではなくルール通り淡々とやるべきだ」と反論したが、大平陣営では「四百点確保」というきわめて低いところからスタートし、国会議員およびその秘書団、郷里の大平後援会会員らが全国に飛んで戸別訪問を行うという、いわば「下から」の戦術をとっていた。これまで大平を支えてきたあらゆる組織が動員され、これらの人々の口から、大平の人柄と政策は急速に有権者に浸透して行った。これらの地道な活動の成果は、大平候補が赴いた各地の演説会の熱烈な歓迎と激励となつてあらわれ、会場が改まることに大平は、聴衆の手こたえが確かなものになつて行くのを感じた。

こうして大平候補選挙本部では、「四百点」から出発した持ち点が「五百点」となり、中盤を過ぎると「六百点」に迫り、たとえ一位はとれなくても、福田首相との得点差は百点以内に接近するとの自信を持つにいたつた。目標をそうした射程にとらえた頃、大平陣営は「本選挙に持ち込めば勝てる」との判断を次第に固

めるようになった。大平は、相変わらず福田勝利を予測している記者にむかって、「本当に君らは大平が負けると思うか」と強気の発言をするようにさえなった。

有権者の郵送による投票は二十六日が締切りであり、投票は十二、三日ごろがピークと見られたが、大平陣営の調査によると、実際にはその時点ではまだ五割七、八分しか投票が終わっていないことが判明した。しかも、それらの人々は支持する候補者が前もって確定している有権者ではないことが推測された。この残票を獲得するために、二十日までには全議員が上京して本選挙に備えるという戦略は急速変更された。同志にはあと一週間、地元でふんばるよつという指令が飛んだ。盟友田中角栄元首相からは、「二十日の段階でもまだ一〇%の投票が残っている。最後まで手を抜かぬよう」との助言とともに、自ら作成した全都道府県における四候補の予想得票分析等、詳細な資料が届けられた。

下旬に入ると、劣勢とされた東京でも、手こたえは十分であり、勝利が悪くても七百点前後で大接戦、という自信を持てるまでになった。

大平陣営の予想外の追込みに危機感を覚えた福田首相は、十一月二十二日、都内のホテルで開かれた有志議員の懇談会であいさつし、総裁公選の実態について、「当初の目的に反して『物量作戦』が展開され、派閥が地方に拡散するなどの悪い面が出てきている」と述べ、名指しは避けたものの、大平、田中の両陣営を批判した。大平はただちにこれに対して、「党改革を推進すること、本選挙をルール通りに実施することは、私がこれまで主張してきたことであり、福田さんがそういう考えになったのはいいことだ。汚れた選挙が心配だというが、それは福田さんなり私なりの候補者が、公正、清潔に選挙をやって行けばいいのではないか。他人ごとではないのだ。私の陣営が特に激しい物量作戦をやったとは思っていない」と強く反論した。

なお、本選挙での対決が避け難くなったことを感じはじめた福田側の焦りをあらわすものとして、二十三日の『読売新聞』に、本選挙対策として三福中連合結成の動きが報じられた。

十一月二十七日、いよいよ開票の日がきた。大平は、いつもより少し早く午前六時に起床し、新聞がそろふまでの時間を読書に過ごした。記者に感想を聞かれ、「いつもと同じ心境だなあ。ぼくはだいたい鈍感なのかな。……要するに第一次試験だからな」と軽く受けとめ、票読みについても、「誰もわからないところがおもしろいんだよ。暗中模索するところに楽しみがあるんだ。それが神さまの英知じゃないのかな」と淡々と語った。

午前十時過ぎからは、各都道府県ことにはじまった開票が進むにつれて、大平が予想以上に善戦していることが明らかになって行つた。この開票は、全国の県連ごとに一斉に行われたが、開票の状況は普通の選挙と同じで、四人の候補者の数字がナマの得票数で宏池会の事務所に設けられた選挙本部に電話連絡されてくる。開票の関心は大平、福田の各県ごとの得票比率であつた。選挙本部の最終の票読みによると、大平の得票は六百八十点から七百十程度となり、それに対し福田も七百点前後で両者ほぼ並んだと考えられ、悪くとも五十点以内の僅差に追い込んでいくという見方で一致していた。

青森、福島、大阪と最初の得票数字が入り、その比率が最終票読みの比率を上回っていることがわかると、宏池会の会長室に詰めかけていた十人ほどの幹部の間から「ほんとうか」という声があがった。開票室から運ばれる票には、予測を下回るものは一つもなかった。まだ百点前後の段階から幹部たちの交わす声も明るくはずんできた。こうして十一時半頃になると開票終了の県が出はじめた。持点は予測を一点、二点と上回り、悪い県でも読み通りである。不安が拭いきれなかつた東京、埼玉、北海道といった大票田でも、大平が二位に入るのは確実となつてきた。

昼頃には幹部室の票読み班は、大平が一位となることを確信するにいたつた。この頃になると、テレビや新聞等の報道陣もまじえ、足の踏み場もなくなつた宏池会事務所では、一県の持点が決まることに歓声があ

がる。午後一時前、夕刊の見出しを聞きにくる新聞記者にも「大平、逆転の勢い」『大平優勢、一位確実』等、強気の見方を伝える。この頃には、大平が過半数を取れるかもしれないという見方さえ出てきた。こうして、開票が手間取った数票も最終持点が決まり、四時頃には全部の開票が終了した。

最終結果は、大平正芳七百四十八点（約五五万票）、福田赳夫六百三十八点（約四七万票）、中曾根康弘九十三点（約二九万二千票）、河本敏夫四十六点（約八万八千票）で、大平が福田に百十点の大差をつけての圧勝であった。『大平氏が逆転首位』という各紙の号外が盛り場に舞った。

夕刻、続々と宏池会の事務所に帰ってきた同志たちは、予備選勝利という満足感にひたりながら、ホテルオークラの一室で大平幹事長を囲む夕食会を開いた。だが、まだ選挙は終わつたわけではない。大きなステツプは超えたものの、福田首相が本選挙に向けて、どんな反応を示すかわからない。浮かれた気分は皆無であった。大平自身も、終始けわしい表情を崩さず、「有権者の重い期待を感じている」と言葉少なに語つただけで、六時四十分、そのまま私邸へ向かった。

そのころ福田陣営は首相の進退をめぐる混乱の最中であつた。官邸の執務室にとじこもつた福田首相のもとには、大勢の判明した四時過ぎから派内の幹部、若手が続々とつめかけ、中川一郎ら強硬グループは、「あくまで本選挙に突入せよ」と主張し、塩川正十郎らは「本選挙を辞退すべきだ」と反論、三時間以上に及ぶ激論が続いていた。午後七時半、福田はついに肚を固め、執務室から姿を現して、記者会見のため党本部に向かった。

「あの結果をみて率直に言つてびっくりした。私はかねてから予備選挙の結果を尊重すると言つてきた。つまり、本選挙には立候補しないという決意だ。……まア、天の声も変な声もたまにはあると思う。きょうは敗軍の将、兵を語らずだ……」。

これが福田首相の退陣表明であつた。この瞬間、大平正芳の自由民主党総裁は事実上決定した。本来なら

は勝利の叫びのあがるところであった。が、宏池会事務所のテレビでこの記者会見を見ていた同志たちは、会見する首相の表情があまりにも苦渋に満ち、こわばっていたので、誰一人声を発しなかった。勝利にもかかわらず重苦しい沈黙が、室内を支配していた。

記者団の要請で急遽、大平「新総裁」に事務所に戻るよう連絡が飛び、大平は折返し事務所に戻ってきた。いくつものテレビのライトが照りつけるこつた返した宏池会の会議室で、大平の記者会見がはじまった。

「先ほど福田総理の記者会見を拝聴した。あのような決断をされたことに、あらためて敬意を表する。予備選挙中に総理が言われていたことを実行された点、戦う力を十分に持ちながら、党内に必要以上の混乱を招かないように、という愛党の精神から出たものと思い、深い敬意を表する。この気持ち在今后の党運営に生かしていくつもりである」。

大平はこう述べたあと記者団の質問に答え、「(大平政権の基本は)党内の融和を第一としなければならぬ。内外ともに大変な時局なので、党が一致結束して当たる必要がある。(私は)その先頭に立たなければならぬと思う。新政治勢力の結集については具体的なことは考えに及んでいないが、党内の人材には出来るだけ働いてもらうよう、偏頗な党運営はしてはならないと思う。清新で強力な体制を整えるのは当然の任務である」と述べた。つづいて、「一瞬に意味がある時もあるし、十年、二十年に実のない時間もある。歴史というのは奇妙なものだ」と語った大平の顔は厳肅そのもので、一語一語を選び、苦渋を噛みしめているような勝利の会見であった。

大平が予備選で大差で勝利という結果は、多くのマスコミの予測を完全に裏切るものであり、そのために勝因が、田中派の物量作戦による支援とするものが少なくなかった。たしかに田中派は、わがことのように大平のために闘った。これなくしては、大差での勝利は実現しなかったであろう。また、得票率で四三%の大平が五〇%に迫る時点を獲得した戦略の正しさも上げなければなるまい。しかし、最大の勝因は、大平が、

田中派も含めて、全部隊の活動エネルギーを爆発的に噴出させたことであつた。田中角栄は、「長い交友の中で、大平君が一点の迷いも逡巡もなかつたのは、後にも先にもあの時だけだつた」と述懐している。

大平の政治的生涯を賭けたこの戦いは、たしかに大きな勝利を収めた。しかし、大福協定を道義的拘束力で生きたものにし、拳党体制を壊さずに全党の祝福の中で政権の座につくという大平の願いはかなえられなかつた。この夜、大平邸には三々五々、同志が集まつてきたが、大平の周囲には重々しい空気がみなぎり、笑ひも喜びも遠慮がちであつた。

予備選から二日後の二十九日、大平幹事長は八日ぶりに党本部に帰つた。大平の入る部屋はもはや幹事長室ではなく、党総裁室である。各マスコミのインタビュ、臨時党大会での総裁あいさつの起草等々、新総裁としての過密スケジュールが待つていた。

十二月一日には第三十五回臨時党大会が日比谷公会堂で開かれた。福田一選管委員長から「予備選開票の結果、大平正芳、福田赳夫両氏を『総裁候補』に決定、福田氏から『総裁決定選挙（本選挙）』に立候補を辞退する」旨文書で申し出があり、選管がこれを了承したこと、したがって新総裁候補は大平氏一人になつた」と報告があり、根本龍太郎議長がこれを大会にはかつて、全員異議なくこれを了承した。

大平新総裁のあいさつは次のとおりである。

「ただいま、私は本大会の名において自民党総裁に選出されました。誠に身に余る光栄であり感激であります。まず私は福田前総裁が総裁として、日夜わが党の再建につくされた貢献に心から感謝申し上げます。またこのたび総裁公選において、党の融和と結実のため、自ら候補を辞退された勇断に対し、満腔の敬意を表します。

わが党にとって、現在最も大切なことは、党内の融和と結実をはかることであり、これまで不和と違

和感、こだわりがあったとするならば、これを一掃し、相互信頼の上に立つて、全党が一致結束して党勢の伸長に努めなければなりません。

私は全党的な立場に立つて、公正にして明朗な党運営をはかるとともに、既に手を染めた党改革を推し進め、清潔にして活力ある党再生を期する決意であります。諸君の一層の支援と鞭撻をお願い申し上げます。

「大福が総裁公選で争うようなことになれば、党は大変なことになる」とは、福田も言い、大平も口にしたことであつた。その戦いが行われてしまつたいま、大平にとつて、何よりも緊要なのは、党内の融和を取り戻すことである。だが、争いの重いしこりは、大平総裁誕生の当初からその瘴気を噴きだした。

首班指名の日取りは十二月六日と決まり、大平総裁は、新政権の人事にとりかかつた。大平の構想は、その骨格となる党三役を重厚なものとし、内閣の閣僚に新人を多数抜擢して清新なものとするのであつた。まず、幹事長には、多年「大平の片腕」として手腕を発揮してきた鈴木善幸を起用する肚であつた。だが、福田派を中心に三木、中曽根の両派が、鈴木幹事長案に「三木内閣発足当時の「総裁派閥から幹事長は出さない」との申合わせに反する」という理由で反対した。

すでに大平は事実上「総裁」に決まつた十一月二十八日と首班指名を直前にした十二月五日に、それぞれ福田を訪ねて会談し、入念な事前調整を行い、福田は大平体制への協力も約束して「党の円満な運営と結束」で合意にも達していたのである。福田派内から流れる「総裁派閥からの幹事長起用」批判論についても、「福田政権発足時は、私の方から何も条件を出さなかつた。福田氏も協力してくれるはず」と信じてやまなかつた大平としては、福田自身が党の混乱を増大するような行動をとるとは思いもよらぬことであつた。一方、福田側としては、大福協力体制を継続するのなら、党運営には福田の意向を尊重すべきだという主張があつたのであろうが、福田派内は、「幹事長を大平派から起用するなら国会での首班指名投票は白紙で臨む」とい

う強硬論を抑えきれない事態になって行つた。

政治の空白を避けるために、目をつぶらねばならぬところはつぶらうと決意した大平総裁は、十二月五日夜、私邸に鈴木を招いて収拾策を話し合い、急速、幹事長に同じ宏池会の斎藤邦吉を起用する考えを明示した。鈴木も大平の気持ちを理解し、その提案を了承して私邸に引き揚げて行つた。大平は直ちに私邸から福田に電話でこの旨を伝えた。

福田が「斎藤幹事長」を了承したにもかかわらず、福田派それに中曽根派も加わって、「大平派の幹事長を引つ込めない限り、衆議院本会議出席は拒否」だと、なおも混乱は続き、党内がまとまらないため、六日に予定されていた首班指名の衆議院本会議は、ついに開かれなかつた。国会史上、議院運営委員会で話のついた首班指名が流れたのは始めてのことである。

この夜、福田派の渡海元三郎、加藤六月が大平を私邸に訪ねてきた。斎藤幹事長は「暫定」にできないか、あるいは三役にしても幹事長からははずせないか、とわざわざ打診にきたのである。大平は「そんなことはできない」とこれを拒否した。

七日午前八時、大平は詰めかけた記者団に「野沢（福田の私邸）に行つてくる」と言い残して福田邸に向かつた。会談を終えて私邸に戻つた大平は、「福田さんは協力すると言つていた。中曽根派には福田さんから話すことになつた」と、ようやく肩の荷を下ろした表情であつた。「総裁派閥から幹事長を出すことは今回限りの暫定的なものとする」との合意が両者の間で成立したのである。さしもの福田派も、福田の説得で鋒を収め、七日夕刻、やっと首班指名にこぎつけた。

重い勝利のあとの重いスタートであつた。